

第12回恵比寿映像祭、テーマおよび作家第1弾 発表



令和2（2020）年2月7日（金）～2月23日（日・祝）

《15日間》月曜休館／10:00～20:00 ※最終日は18:00まで／入場無料 ※定員制のプログラムは有料

会場 | 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／

恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

TOP MUSEUM 東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

開催概要 |

恵比寿映像祭は、年に一度、15日間にわたり展示、上映、ライブ・イベント、トーク・セッションなどを複合的に行う映像とアートの国際フェスティバルです。映像分野における創造活動の活性化をめざし、東京都写真美術館全館および地域会場で開催されます。第12回となる今回は、「時間とは何か」という映像が併せ持つ本質について迫ります。展示や上映の作品から、鑑賞者と映像を巡り・楽しみ・考えるプログラム「YEBIZO MEETS」の展開までを通じて、多様な映像表現に触れていきます。

[名称] 第12回恵比寿映像祭「時間を想像する」

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2020:
The Imagination of Time

[会期] 令和2(2020)年2月7日(金)～2月23日(日・祝)《15日間》月曜休館

[時間] 10:00～20:00 ※最終日は18:00まで

[会場] 東京都写真美術館／日仏会館／ザ・ガーデンルーム／
恵比寿ガーデンプレイス センター広場／地域連携各所 ほか

[料金] 入場無料 ※定員制のプログラムは有料

[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館・アーツカウンシル
東京／日本経済新聞社

[共催] サッポロ不動産開発株式会社／公益財団法人日仏会館

[後援] 駐日ブラジル大使館／TBS／J-WAVE 81.3FM

[協賛] ANA／サッポロビール株式会社

[協力] ぴあ株式会社／ドゥービー・カンパニー株式会社／株式会社ロボット

[公式HP] www.yebizo.com

恵比寿映像祭のミッション |

映像文化の創造と紹介・体感の場としてのフェスティバル

恵比寿映像祭は、映像領域と芸術領域を横断するフェスティバルとして、2008年度(2009年2月)より開催され、今年度で12回目を迎えます。文化都市東京・恵比寿から発信するフェスティバルとして、東京都写真美術館の全フロア、恵比寿ガーデンプレイスおよび地域に広がる文化施設と共に開催しています。映画、アニメーション、実験映像、ドキュメンタリー、現代美術ほか、多様なジャンルの映像芸術表現が一堂に揃います。

この恵比寿映像祭のカッコのロゴが象徴するのは、カッコの中に入れて、皆で映像について考えてみよう！という姿勢です。

なお、第12回恵比寿映像祭は、オリンピック・パラリンピックの開催都市東京が展開する、2020年に向けた文化の祭典「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の1つとして実施するものです。

1 映像文化を紹介・体感する

多くの人々が多様な映像芸術表現に触れる「開かれた」
機会(豊かな感性を育む機能)

2 映像文化を創造する

新進作家の発掘・支援(作家の跳躍台としての機能)

3 映像文化の楽しさと出会う

フェスティバルを通じて映像文化の楽しさと出会い
ジャンルや地域の垣根を越え交流



第12回恵比寿映像祭

時間を想像する

Yebisu International Festival for
Art & Alternative Visions 2020

The Imagination of Time

時間は、時計の針のように一方向に進んでいるように見えます。人間にとって当たり前前に存在していると思われていながら、いざ「時間とは何か」と問われたら、こたえるのは容易ではありません。宇宙の起源や生命の働きなどと同様に、現代物理学の世界でも時間はいまだ大きな謎に包まれています。

一方、映像のなかでは、時間は逆行したり、現在と過去や未来がつながったり、人々が、そのなかを自由に行き来することもできます。さらにアートをはじめとする様々な映像表現では、すでに起こった過去の出来事や歴史による集団的記憶をどのように伝え記録し、あるいは予測不可能な未来をいかに語ることができるのかという問いのもと、さまざまな時間のとらえ方がなされています。例えば、超高速カメラは、肉眼ではみることができない瞬間をとらえ、SF（サイエンス・フィクション）映画は近未来の世界や、人間以外の時間を描いてきました。むしろ、私たちは、現存する時間ではなく、映像によって浮き彫りにされる不可視の時間の存在を確かめながら、自らがいる今をとらえようとしているのかもしれません。

第12回恵比寿映像祭では、「時間を想像する」をテーマに、多彩な作品やプログラムをご紹介します。誰にとっても身近であり同時に解き明かされていない時間にかかわる作品をとおして、新しい発見が生まれ、観客との対話や交流を導く機会を作りたいと思います。そして、アートや映像表現から時間を想像することで、動く写真（motion picture）である映像の本質に迫り、あらためて現在をみつめ考察していきます。

第12回恵比寿映像祭ディレクター 田坂博子

「時間を想像する The Imagination of Time」のコンセプト |

総合テーマ「時間を想像する」は、以下のような視点で構成しています。

映像によって時間を記録し、描き、思いめぐらす
時計の針の動きとは異なる「時間を想像する」ことで、今を考えていきます

1 時間を記録する

(1) 新しいドキュメンタリー

過去の出来事や歴史をいかに再現し、語り伝えていくことができるのだろうか。映像によって事実はどうのように記録することができるのか。ドキュメンタリーの新しい可能性を探ります。

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・ザニ《移動の自由》2017年
Nina FISCHER & Maroan EL SANI, *Freedom of Movement*, 2017



[参考図版]

(2) 新しい神話へ

私たちの記憶は、未来の人々からはどのようにみえるのか。映像表現は時に、集団的な記憶の再編成もしくは神話にもなりうるのだろうか。語りの実践から生まれる記憶のゆくえに問いを投げかけます。

小森はるか+瀬尾夏美《二重のまち／交代地のうたを編む》2019年
KOMORI Haruka + SEO Natsumi, *Double layered town/Making a song to replace our positions*, 2019
Photo: Tomomi Morita



[参考図版]

2 時間を表現する ポストヒューマン

宇宙や自然、動物など人間以外の存在にとっての時間とは何か。映像はどのように、その経過や見え方、感じ方をあらわすことができるのだろうか。

三原聡一郎《自然の監視、自然の生成》2019年 [参考図版]
MIHARA Soichiro, *Natural Observation, Formation of nature*, 2019
[related image]
Courtesy of Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University
Photo: YAMAMOTO Tadasu

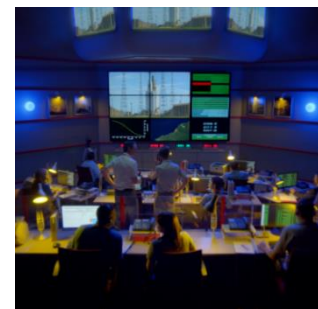


[参考図版]

3 イマジナリータイム（虚時間） SF

時間は存在するのだろうか。SFが描く未来は、宇宙の謎を紐解けるのだろうか。量子力学の虚時間——宇宙の時間への問いが、現実につながっていく。

スタン・ダグラス《ドッペルゲンガー》2019年
Stan DOUGLAS, *Doppelgänger*, 2019
© Stan Douglas Courtesy the artist, Victoria Miro and David Zwirner



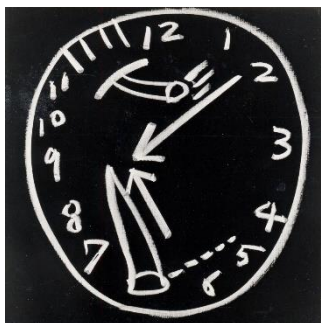
[参考図版]

すでに起こった過去の出来事や歴史による集団的記憶を
どのように伝え記録し、あるいは予測不可能な未来を
いかに語ることができるのか——映像の「時間を想像する」

出品予定作家 |

シュウゾウ・アヅチ・ガリバー Shuzo AZUCHI Gulliver

展示



1947年滋賀県大津市生まれ、東京在住。彫刻、版画、写真、パフォーマンス、インスタレーション等などの幅広いジャンルを横断する現代美術作家。高校時代にマルセル・デュシャンの著作に衝撃を受け、1965年にハプニング《草地》を発表。1967年にはハプニング集団〈プレイ〉に参加。上京後は、映画という媒体そのものに注目する実験的な映像作品を制作し、1969年「インターメディア・アート・フェスティバル」にて《Cinematic Illumination》（2017年に東京都写真美術館で再制作）を発表する。1990年代以降、ヨーロッパを中心に積極的に作品を発表している。

シュウゾウ・アヅチ・ガリバー《De-time #30》1985年 [参考図版]

Shuzo AZUCHI Gulliver, *De-time #30*, 1985 [related image]

自らの身体への問いを出発点として、幅広い作品を制作してきたシュウゾウ・アヅチ・ガリバー。量子論と身体、コンセプチュアルな方法論で時空の謎に問いをなげかける。

マーティン・バース Maarten BAAS

展示



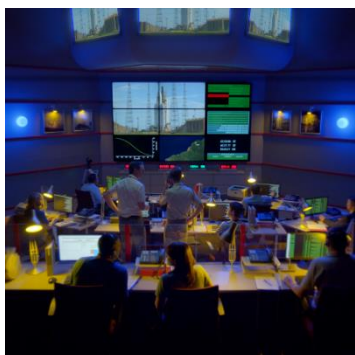
1978年生まれ、オランダ在住。バースは21世紀初頭の最も影響力のあるアーティスト・デザイナーの一人とされ、彼の作品はアートとデザインの境界にまたがり、コンセプチュアルアート、クラフツマンシップ、インスタレーション、パブリックスペース、パフォーマンスが、すべてにおいて具体化されている。同時に、限られたデザイン・コレクションとしても高い価値をもつ。くわえてバースは、反骨精神に富み、知的、また、演劇的かつ芸術的なスタイルでも知られている。

マーティン・バース《スウィーパーズ・クロック》2009年
Maarten BAAS, *The Sweepers clock*, 2009

毎日当たり前のように見ている時計を、もし人が掃除しながら動かしていたら？人間の行為によって、あらためて時間の意味が浮かび上がる、マーティン・バースのリアルタイム・シリーズの時計。

スタン・ダグラス Stan DOUGLAS

展示



1960年ヴァンクーバー（カナダ）生まれ、在住。1980年代後半から、映像と写真の制作をはじめ、近年では、演劇や領域横断的なプロジェクトなどを手がけ、それぞれのメディアにおけるパラメーターの動きを探っている。イメージの創造におけるテクノロジーの役割や、それらがいかに媒介されて浸透し集団的な記憶を形作るかを継続して調査する。それによって、一見特定の歴史的・文化的背景を持つようで、その実広くアクセス可能な作品を生み出している。

スタン・ダグラス《ドッペルゲンガー》2019年
Stan DOUGLAS, *Doppelgänger*, 2019

© Stan Douglas Courtesy the artist, Victoria Miro and David Zwirner

カナダを代表するアーティスト、スタン・ダグラスの最新ビデオ・インスタレーション《ドッペルゲンガー》。理論物理学の「量子テレポーテーション」を参照しながら、宇宙の謎に挑むSF作品。

ニナ・フィッシャー & マロアン・エル・ザニ Nina FISCHER & Maroan EL SANI

展示



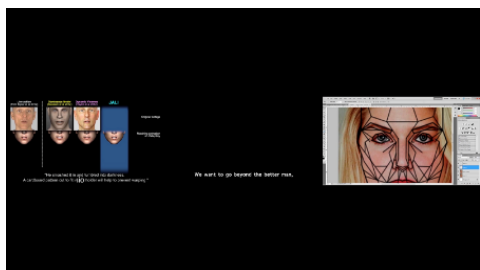
ニナ・フィッシャーとマロアン・エル・ザニは、ベルリン在住のヴィジュアルアーティスト、映画作家。1995年より共同制作を行ない、ベルリン国際映画祭やロッテルダム国際映画祭、シドニー・ビエンナーレ、光州ビエンナーレ（韓国）、イスタンブール・ビエンナーレ、リヴァプール・ビエンナーレ（イギリス）、マニフェスタ4（ベルギー）、メディアシティ・ソウル、あいちトリエンナーレ、東京都写真美術館やイタリア国立21世紀美術館での個展など世界規模に参加している。

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・ザニ《移動の自由》2017年
Nina FISCHER & Maroan EL SANI, *Freedom of Movement*, 2017

ドキュメンタリーとフィクションを横断し、独自の映像世界を築いてきたフィッシャー&エル・ザニ。今回紹介する最新インスタレーションではローマ・オリンピックでアフリカ人初の金メダルを獲得したアベベ・ビキラの軌跡を追う。

グアン・シャオ GUAN Xiao

展示



1983年生まれ、北京在住。グアンは中国伝媒大学を卒業し、その後2007年以降国際的に作品展示を行なっている。近年はボン・クンストフェライン（ドイツ）、クンストハレ・ヴィンタートゥール（スイス）、ハイ・ライン（ニューヨーク）、ICA（ロンドン）、第57回ヴェネツィア・ビエンナーレなどの展覧会に参加している。

グアン・シャオ《普通の日》2019年 [参考図版]
GUAN Xiao, *Just a Normal Day*, 2019 [related image]
Courtesy the artist; Kraupa-Tuskany Zeidler, Berlin; and Antenna Space, Shanghai.

インターネットによって、人々が受け取る情報のイメージはどのように変わったのか。インターネット上のファウンド・イメージや既製のプロダクトを用いたレディメイド作品を発表してきた中国気鋭のアーティスト、グアン・シャオの最新インスタレーション。

グラダ・キロンバ Grada KILOMBA

展示



リスボン生まれ、ベルリン在住。領域横断的な活動を行なうアーティストであり文筆家。キロンバの作品は、ストーリーテリングを中心的な要素に、脱植民地的な実践を行なうことで、学術的な領域と芸術的な言語によるハイブリッドな空間を作り出している。第10回ベルリン・ビエンナーレ、ドクメンタ14（ドイツ）や第32回サンパウロ・ビエンナーレ（ブラジル）など、国際的に作品を発表している。

グラダ・キロンバ《イリュージョンズ（幻想）第2章—オイディプス》2018年
Grada KILOMBA, *ILLUSIONS Vol. II, Oedipus*, 2018
Installation View at Goodman Gallery, Cape Town, 2018,
Courtesy of Goodman Gallery

多様なメディアをとおして、歴史を再構築し、新しい物語の可能性を探求してきたキロンバ。ギリシャ悲劇「オイディプス」の西洋中心的な文脈を、周縁的な視点から、映像やパフォーマンス、テキストなどをとおして語り直す。

出品予定作家 |

小森はるか+瀬尾夏美

KOMORI Haruka + SEO Natsumi

展示

上映



映像作家の小森（1989年静岡県生まれ）と画家で作家の瀬尾（1988年東京都生まれ）のユニット。東日本大震災をきっかけに活動開始。2012年より3年間、岩手県陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年、東北で活動する仲間とともに、土地と協働しながら記録をつくる組織・一般社団法人NOOK（のおく）を設立し、仙台に拠点を移す。現在も陸前高田での制作と対話の場づくりを活動の軸にしながら、全国各地へ赴き巡回展を開催。

小森はるか+瀬尾夏美《二重のまち／交代地のうたを編む》2019年
KOMORI Haruka + SEO Natsumi, *Double layered town/Making a song to replace our positions*, 2019
Photo: Tomomi Morita

東日本大震災をきっかけに東北を拠点として継続的に活動を行う小森はるか+瀬尾夏美。2031年の未来をみつめながら、震災以降の時間に向き合う新作《二重のまち／交代地のうたを編む》を上映と展示で紹介。

三原聡一郎

MIHARA Soichiro

展示



世界に対して開かれたシステムを提示し、音、泡、放射線、虹、微生物、苔、気流、土そして電子など、物質や現象の「芸術」への読みかえを試みている。2011年より、テクノロジーと社会の関係性を考察するために空白をテーマにしたプロジェクトを国内外で展開中。2013年より滞在制作として北極圏から熱帯雨林、軍事境界からバイオアートラボまで、芸術の中心から極限環境に至るまで、これまでに計8カ国11箇所を渡ってきた。

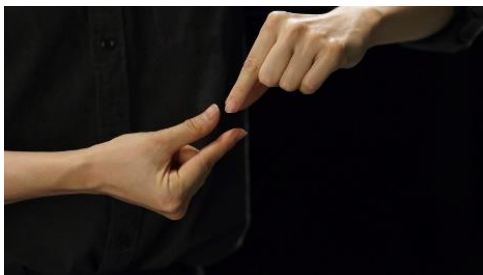
三原聡一郎《自然の監視、自然の生成》2019年 [参考図版]
MIHARA Soichiro, *Natural Observation, Formation of nature*, 2019 [related image]
Courtesy of Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University Photo: YAMAMOTO Tadasu

メディアテクノロジーをもちいながら、自然、社会をとりまく世界の現象を可視化する芸術作品の実践を精力的に行ってきた三原聡一郎。恵比寿映像祭のテーマに挑む最新作を発表。

ナム・ファヨン

NAM Hwayeon

展示



社会システムや時間、空間などの様々な現象をとらえるアーカイブ資料を通じて、舞踏術の研究に取り組んでいる。個展に、「イムジン河」（Audio Visual Pavilion、ソウル、2017）「Time Mechanics」（アルコ・アートセンター、ソウル、2015）などがある。ソウル在住。

ナム・ファヨン《半島の舞姫》2019年
NAM Hwayeon, *Dancer from the Peninsula*, 2019
Photo: GIM IKHYUN © Hwayeon Nam

2019年ヴェネツィア・ビエンナーレ韓国館代表の一人であり、国際的に活躍するナム・ファヨン。第二次世界大戦前から戦中にかけて日本や中国をはじめ各国で活躍し、西洋と東洋両方の舞踊史において伝説的な存在となった崔承喜に迫った最新回遊型インスタレーション。

出品予定作家 |

小田香 ODA Kaori

上映



1987年大阪府生まれ。フィルムメーカー/アーティスト。イメージと音を通して人間の記憶（声）「私たちはどこから来て、どこに向かっているのか」を探究する。2013年、映画監督のタル・ベーラが指揮する映画作家育成プログラムfilm.factoryに参加し、2016年に修了。ボスニア炭鉱を撮った長編第一作《鉱 ARAGANE》（2015）が山形国際ドキュメンタリー映画祭アジア千波万波部門にて特別賞受賞。

小田香《セノーテ》2019年
愛知芸術文化センター・愛知県美術館オリジナル映像作品
ODA Kaori, *Cenote*, 2019
AAC/APMoA Film

長編デビュー作《鉱 ARAGANE》で国内外の高い評価を得て、注目されている小田香の最新作。メキシコのユカタン半島北部の洞窟内の泉セノーテを舞台に、その原風景や集団的記憶に迫る。

アンナ・リドラー Anna RIDLER

展示



さまざまな情報やデータに取り組むアーティスト、研究者。ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（イギリス）を修了。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館（イギリス）、アルス・エレクトロニカ（オーストリア）、テート・モダン（イギリス）などで作品展示を行なう。ドローイング、マシンラーニング、データコレクション、ストーリーテリング、そしてテクノロジーといった分野に興味を持っている。

アンナ・リドラー《モザイク・ウィルス》2018-2019年
Anna RIDLER, *Mosaic Virus*, 2018-2019

新しいテクノロジーの可能性を探索する活動で注目されているアーティスト、アンナ・リドラー。《モザイク・ウィルス》では、17世紀のオランダで起こったチューリップの球根高騰によるバブルと、現代のビット・コイン・バブルがAIによって結びつけられる。

ベン・リヴァース Ben RIVERS

展示

上映



1972年サマセット（イギリス）生まれ、ロンドン在住。ファルマス大学（イギリス）で彫刻を学び、写真と8ミリ映画制作を行なう。数多くの受賞作には、第68回ヴェネツィア国際映画祭にて国際映画批評家連盟賞を受賞した《湖畔の2年間》や、近年の展示作品として《スロウアクション》（ヘップワース・ウェイクフィールド、2011）、《サック・パロウ》（ヘイワード・ギャラリー、ロンドン、2011）などがある。

ベン・リヴァース《ゴースト・ストラータ》2019年
Ben RIVERS, *Ghost Strata*, 2019
Courtesy of Ben Rivers and LUX, London.

世界各地の映画祭で高く評価され、近年では共同作品も多く発表する実験映像作家ベン・リヴァース。16ミリフィルムの質感で切り取られた風景は、ドキュメンタリーとフィクションの間で独自の世界観に変容する。

多和田有希 TAWADA Yuki

展示



1978年静岡県浜松市生まれ。自ら撮影した写真を消す（削る、燃やすなど）という行為を通し、都市や群衆の集合的無意識や個の意識変容をイメージとして湧出させる。京都造形芸術大学専任講師。美術博士（東京藝術大学）、写真学士（ロンドン芸術大学）、農学学士（東北大学）。近年の展覧会に、個展「悪魔祓い、系統樹、神経の森」（G/P gallery、東京、2018）、「カミナリとアート 光/電気/神さま」（群馬県立館林美術館、2017）、「写真都市展ーウィリアム・クラインと22世紀を生きる写真家たちー」（21_21 DESIGN SIGHT、東京、2018）など。

多和田有希《Family Ritual 2》2018年
TAWADA Yuki, *Family Ritual 2*, 2018
Photo: Fuyumi Murata

撮影した写真を削り、あるいは燃やすというプロセスを通して、写真表現の境界を拡張しつつける多和田有希。氾濫する写真によるイメージを自らの手の触覚によって、異なる物質へと変容させる。

トークやライブなど多様なプログラム |

トーク・セッションやパフォーマンス、イベントなどを開催。展示や上映だけではなく様々な形式で、映像文化の楽しみ方や理解を深める場をお届けいたします。

■ラウンジトーク■ 開放的な美術館 2Fロビーの吹抜け空間では、カジュアルな雰囲気の中で、作家や作品の背景に触れる「ラウンジトーク」を開催いたします。映像というメディアについてさらに理解を深め、発見を促す機会を提供します。

■シンポジウム■「展示」「上映」プログラムと連動し、テーマにちなんだ「シンポジウム」を実施し、豊かな議論を喚起していきます。

■イベント■ ザ・ガーデンルームでは、映像に関連する「イベント」を実施いたします。

プログラムの詳細は決定次第、恵比寿映像祭公式ウェブサイト（www.yebizo.com）で発表いたします。

ラウンジトーク	東京都写真美術館 2F ロビー（無料）
シンポジウム	東京都写真美術館 1F ホール（定員190名／有料チケット制）
イベント	ザ・ガーデンルーム（定員150名／有料チケット制）



【展示出品作家】ミハイル・カリクス ラウンジセッションの様子
第11回恵比寿映像祭（会場：東京都写真美術館）より
撮影：新井孝明



ライブ・イベント 曾我大穂×小金沢健人——special guest スズキ
タカユキ「映像を追いかけて～音とイメージの夢幻サーカス」の様子
第11回恵比寿映像祭（会場：ザ・ガーデンルーム）より
撮影：新井孝明

映像文化の楽しさを地域と共に発信！「YEBIZO MEETS」 |

恵比寿地域に点在する文化施設やアート団体と連携し、恵比寿映像祭のテーマに合わせたそれぞれ独自の視点によるプログラムや参加型のプログラムを「YEBIZO MEETS」という呼称で開催いたします。多様な映像表現や映像文化の楽しさに出会う「開かれた」機会として、作品を体感し理解するプログラムや地域を巡るスタンプラリー、地域連携プログラムなどを実施いたします。ぜひお楽しみください。



会場構成 | (予定)

①東京都写真美術館

東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

展示 上映

ラウンジトーク

シンポジウム

②日仏会館

東京都渋谷区恵比寿3-9-25

展示

シンポジウム

③ザ・ガーデンルーム

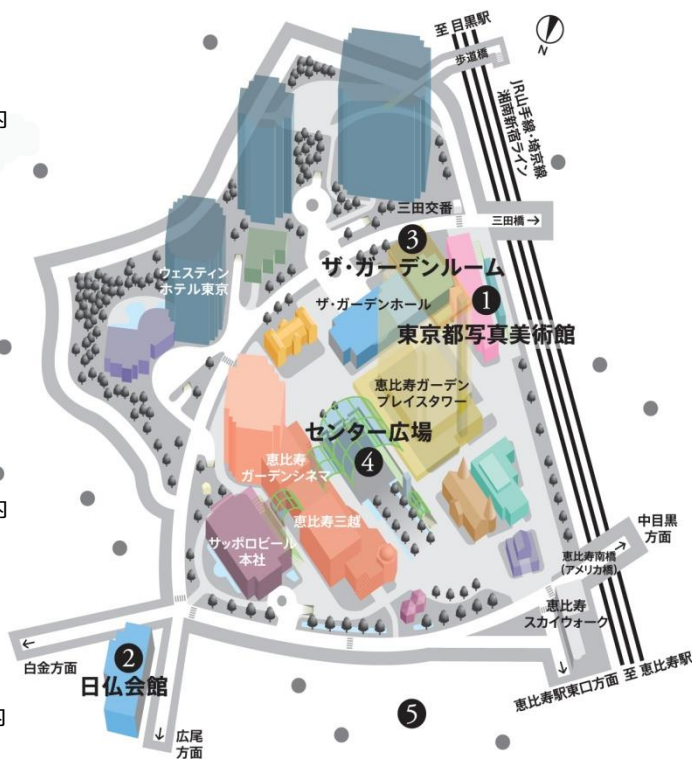
東京都目黒区三田1-13-2 恵比寿ガーデンプレイス内

イヴェント

④恵比寿ガーデンプレイス センター広場

東京都渋谷区恵比寿4-20 恵比寿ガーデンプレイス内

オフサイト展示



⑤ 恵比寿地域文化施設およびギャラリーなど

地域連携プログラム参加施設・団体：

公益財団法人日仏会館 | TMF日仏メディア交流協会 / YEBISU GARDEN CINEMA / MA2 Gallery / CAGE GALLERY / Gallery 工房 親 / MuCuL / NADiff a/p/a/r/t / MEM / AL | TRAUMARIS / NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ [AIT/エイト] / LOKO GALLERY / Rocky Shore

YEBIZO MEETS 「地域連携プログラム／地域発信プロジェクト」

【恵比寿映像祭に関するお問合せ】 ※ 報道・媒体関係者様のお問合せに限らせていただきます。

恵比寿映像祭担当（東京都写真美術館）：柳生（やぎゅう）、印牧（いんまき）

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話：03-3280-0076／ファクス：03-3280-0033／E-mail：yebizo_press@topmuseum.jp

【プレスリリース/広報用画像/ご取材に関するお問合せ】

恵比寿映像祭プレスコンタクト担当

【展示など上映以外】TAIRA MASAKO PRESS OFFICE：平（たいら）

電話：090-1149-1111／ファクス：03-3468-8367／E-mail: info@tmpress.jp

【上映】プレイタイム：斉藤（さいとう）

電話：080-3732-6809／ファクス：03-6781-3101／E-mail: yosaito9@gmail.com

※ 本リリース内で使用している写真を広報用画像としてご用意しております。
ご希望のプレスの方は、①ご希望画像の作品名 ②貴媒体名 ③掲載予定時期
を表記のうえ、上記のプレス担当者までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

※ 12月に作家作品の詳細決定後、2次リリースを発表予定です。
詳細は、恵比寿映像祭公式サイト（www.vebizo.com）でお知らせいたします。

※出品作品および出品作家など事業の内容については、変更する場合があります。予めご了承ください。